


ごあいさつ

理事長 作田誠司



皆さまにおかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

日頃は尼崎信用金庫に格別のご高配を賜り、誠にありがとうございます。本年も、尼崎信用金庫についてのご理解を一層深めていただくために、ディスクロージャー誌「尼崎信用金庫の現況2023」を作成いたしました。ぜひ、ご高覧賜りますようお願い申し上げます。

昨年度のわが国経済は、新型コロナウイルスへの対応と社会経済活動の両立に向けた取り組みが進むなかで、緩やかな回復が期待されました。しかしながら、オミクロン株の派生型による感染の再拡大をはじめ、海外の金融・財政政策の動向やウクライナ情勢、原材料価格や物価の高騰など、景気は先行き不透明な状況が続きました。

このような経済環境のもと、当金庫は2022年度を“第2の創業の年”と位置づけ、次の100年に向けてスタートを切りました。これまで培ってきた協同組織金融機関の理念に、新しい時代に求められる地域金融機関としての取り組みを加え、「地域・お取引先・職員」という金庫のステークホルダーから共感が得られる取り組みを実践してまいりました。

その結果、一般企業の営業利益にあたる業務純益は38億円、経常利益は41億円、当期純利益は30億円となりました。自己資本比率は16.25%と国内基準(4%)を大きく上回り、引き続き高い健全性を維持することができております。

2023年度は、昨年からスタートさせた3ヵ年事業計画の2年目となります。当金庫は、全てのステークホルダーと「ともに成長する」あましんをめざし、お取引先の本業支援・伴走支援をはじめ、地域の持続的発展にしっかりと貢献することで、地元の信用金庫としての役割を果たしてまいりたいと考えております。

今後とも、皆さまのより一層のご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

地域と、お取引先と、職員と。 「ともに成長」するあましんを。

理事長 作田誠司

— ポテンシャルの高い地域に、さらに高度なサービスを

2年前の2021年にあましんは創業100周年を迎え、2022年には、ステークホルダーである地域とお取引先、そして金庫職員に喜びと感動を提供することを目標に掲げる3ヵ年事業計画を策定しました。「第2の創業」との思いで新たなスタートを切り、現在はその2年目にあたります。新型コロナウイルスへの対応も平時へと移行し、社会・経済活動の回復に向けた動きが本格化しています。とは言え、コロナ禍による影響や長期化するロシア・ウクライナ情勢など、世界的な構造変化によって傷ついた社会・経済が完全に元に戻ることは容易ではありません。また、信用金庫を取り巻く環境も大きく変化しています。かつての信用金庫は、預金・融資・為替という、いわゆる金融機関の3大業務を通じて地域経済を支えてきました。しかし近年、お客さまの課題は多様化・複雑化しており、我われ単独では解決できない課題が増えています。金融機関、金融サービス会社のみならず、地方公共団体や大学など、さまざまな組織・機関と手を携え、高度化するお客さまのニーズに丁寧に応えていくことが求められています。



あましんの「これまで」 P07-08

「あましんのDNA、
それは、端的に地域に対する
“本気度”です」



当金庫は、阪神間を中心とする40市4町を営業エリアとして地域に深く根を下ろし活動を続けてきました。本拠を置く尼崎は、昔からものづくりが盛んな地域で、さまざまな工業製品が広く取り扱われてきた賑わいと活気にあふれる街です。この尼崎を中心に、兵庫・大阪の街は地域の産業を育むうえで極めて恵まれた環境にあり、高いポテンシャルを有しています。この街で、当金庫は他の金融機関には負けない地域への思いと確かなサービスを展開し、地元の皆さまから愛され、頼られ、その存在を実感していただけていると思います。これこそが、あましんの最大の強みだと思っています。



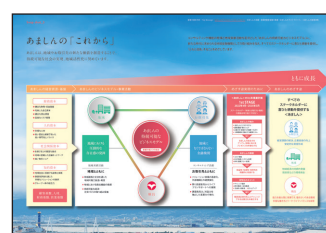
あましんの「いま」 P09-16

——ともに成長する、あましんのDNA

当金庫の強みは、どのように培われてきたのか。私は、そこに独自のDNAがあると考えています。1921年、地元の中小企業者や住民が会員となって互いに助け合い、発展していくという相互扶助の理念のもと、「地域との共存共栄」をめざす協同組織金融機関として発足して以降、役職員が先達から受け継ぎ培ってきた地域への思い、言わば「地域に対する本気度」です。

私自身、入庫して38年になりますが、諸先輩の薫陶を受ける中で地域に対して本気で関わることを学び、今ではそれが自分の体に染み込んでいると感じています。お取引先が発展すれば地域はさらに豊かになり、当金庫も成長できます。それを目の当たりにした職員も喜びを感じ、達成感を得ることができます。「地域・お取引先」「金庫」「職員」、この3つのバランスを大切にします。私たちはこの考え方を「ともに成長」という言葉で表現していますが、これも、あましんのDNAと言えるかもしれません。

理事長としての私の使命は、このDNAを次の世代にしっかりと引き継いでいくことだと考えています。多様な考え方の職員がおり、それぞれに価値観も異なります。昭和の高度成長期であれば、大号令のもとに、一つの価値観と行動様式をもって取り組むということも多かったかもしれませんが、今は令和の時代です。世代、あるいは個人の考え方や価値観を認め、尊重し、それを融合させていくことも大切です。ただ、その前提として、職員には当金庫のDNAの本質、骨太の部分をしっかりと理解してもらいたいと思いますし、管理職にはそういう指導・教育を心掛けるように伝えています。これが続いていく限り、この先も、地域に圧倒的な存在感を発揮し続けることができると確信しています。



あましんの「これから」 P17-18



地域密着型金融の推進 P21-24

——多様な価値観を尊重し、あましんを強くする

多様な個性や価値観を受け入れ、それを力に変えていくダイバーシティ&インクルージョンの考え方が重視されるようになりました。当金庫もこれに積極的に取り組み、女性管理職の積極登用や、給与体系、評価の仕方、ワーク・ライフ・バランスなど、さまざまな角度から改革を進めています。いきいきと働き、自身の生活も大切にしたい職員が増えています。重要なのは制度を整えることだけではなく、それを多くの職員が活用できること、それが当たり前になることです。こうした企業文化の醸成と定着には時間も必要ですが、長期的な展望に立って進めていきたいと考えています。

また採用に関しては、協同組織金融機関という業態、あるいは地域やお客さまとともに成長することが信用金庫業務の醍醐味であることを理解して入庫してもらうこと



人材と働き方 P31-34

「SDGs支援という視点で、 お取引先に新たな成長のきっかけを」



が重要です。その第一段階がクリアできれば、そこからの育成メニューは、外部のリソースを活用した金融コンサルティングのスキル習得を含め、これまでの100年の歴史の中で整えられています。

若い世代の中にも、自身のキャリアプランを明確に持ち、業務を通じて高めたいスキルをイメージしている職員がいます。2023年7月から新たに導入したキャリアチャレンジ制度は、こうした思いに応える内容となっています。



📖 SDGsへの取り組み P25-30

——サステナブルな社会の実現に貢献する

当金庫は、お客さまと「地域の持続的な発展」という価値を共有しています。2019年には「あましんSDGs宣言」を表明し、地域社会の発展を常に考えた事業活動の推進を通じて、SDGs（持続可能な開発目標）の達成に貢献していくことを打ち出しています。

環境、社会への貢献に向けた当金庫の取り組みの1つに、創業90周年を機に創設した「あましんグリーンプレミアム」があります。環境改善に寄与する地域の皆さまの優れた技術や製品、工法、取り組みやアイデアを顕彰し、新技術の開発や環境文化の創造を後押しする制度で、2017年に環境省「持続可能な社会の形成に向けた金融行動原則（21世紀金融行動原則）」において『環境大臣賞』を、2018年には第21回信用金庫社会貢献賞『Face to Face賞』を受賞しています。当金庫は、2025年の大阪・関西万博に共創パートナーとして参画しています。万博を契機にグリーンプレミアムの受賞企業・団体をはじめ、多くのお取引先が新たなビジネスチャンスとして、あるいは次の展開へとステップアップできるようサポートを強化しています。

また、お取引先にはSDGs支援という視点で新たな成長へのきっかけづくりをお手伝いしていきたいと考えています。中小企業経営者の中には、SDGsに取り組んでいかなければならないという思いがあっても、具体的に何から手をつければよいのか、とのお悩みをお持ちの方も多いため、東京海上日動火災保険株式会社などと連携してSDGsの取り組みをサポートする「SDGsサービスパッケージ」をご用意しています。さらに、ESGの要素を取り入れた新しい事業性評価手法の構築をめざし、神戸大学経済経営研究所の家森信善教授との共同研究も進めています。

——ビジョンを共有し、地域の明るい未来へ

急速に進展するデジタル化、デジタルトランスフォーメーションの流れに対しては、昨年4月にDX戦略グループを立ち上げました。2020年からスタートした業務改革

サステナビリティ経営

サステナビリティ(sustainability持続可能性)は、環境や社会、人々の健康、経済などあらゆる場面において「将来にわたって機能を失わずに続けていくことができるシステムやプロセス」のこと。サステナビリティ経営とは、企業が自社の短期的な利益だけでなく、地球をはじめとする様々なステークホルダーと共存しながら長期的に成長し、進歩し続ける経営を指します。

SDGs

(Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標)

2015年9月の国連サミットで採択され、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2030年までに持続可能でよりよい世界をめざす国際目標です。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない(leave no one behind)」ことを誓っています。

ESG

Environment（環境）・Social（社会）・Governance（ガバナンス・運営/統治）の頭文字を取った言葉。サステナビリティ経営における3つの要素とESGは共通していますが、こちらは国連が提唱した投資の際の判断基準としての3つの要素を意味します。企業に環境や社会への配慮が求められるようになり、企業を選ぶ基準や企業の成長度合いを見極める要素としてESGは重視されるようになっていきます。

(BPR)の取り組みにデジタル技術を効果的に取り入れるとともに、2023年1月から新たな勘定系システムを稼働させ、業務プロセス全体の効率化を追求しています。これにより、お客さまの利便性を向上し、効率化によって生み出された人員と時間が人がコミュニケーションを取ることで価値が発揮される分野に振り向け、接点を持つことが難しかったお客さまへの新しい金融サービス・チャネルの提供、外部機関との連携によるお取引先のDXに向けたサポートを加速させることで、「ともに成長」する取り組みをさらに進化させていきたい考えです。

振り返りますと、あましんが産声を上げた1921年、日本は第一次世界大戦の戦後恐慌の最中にあり、またスペイン風邪が猛威を振っていました。その逆風に、松尾高一・中江清という創業の中心となった2人は立ち向かいました。それは、どこか現在の状況と似通っているように思います。サステナビリティ、デジタル化、ダイバーシティ&インクルージョンなど、取り組むべき課題は時代とともに変化していますが、地域やお取引先の課題に向き合い、解決の道を模索し、サポートしていくという「あましんのDNA」、創業の志は、いささかも揺るぎません。

目標とする地域の明るい未来に向かってビジョンを共有し、そこへ向かう道筋を「未来を起点」に考え、行動するバックカスティングの発想で地域・お取引先・職員の未来を想像し、知恵を出し、汗をかき、一丸となって明るい未来をデザインしていく「あましん」に、これからも引き続きご期待ください。

BPR

Business Process Re-engineeringの略で、業務本来の目的に向かって既存の組織や制度を抜本的に見直し、プロセスの視点で職務・業務フロー・機構・情報システムをデザインし直すことをいいます。

DX

Digital Transformationの略で、「デジタル革新」や「デジタル変革」という意味の言葉です。企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争力の優位性を確立することをいいます。

Column

～DX戦略による生産性向上とチャネル改革～

デジタル技術の革新により、異業種からの金融サービスへの参入など、金融機関を取り巻く環境は大きく変化しています。また、インターネットやスマートフォンの普及に伴い、これまでの店舗やATMを通じて提供されてきた金融サービスの多くがデジタルチャネルを通じて利用可能となっています。〈あましん〉は、データやデジタル技術を活用してお客さま目線で新たな価値を創出するとともに、高度なデジタルソリューションの提供により、事業成長支援・地域社会の持続的発展に貢献してまいります。

あましんのDX推進への取り組み

